

September 20, 2026

響き渡る神の言葉 テサロニケ第一 1:7-8

1:7 その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。

1:8 主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています。そのため、私たちは何も言う必要がありません。

私たちは今、「テサロニケ人への手紙」を開いていますが、「テサロニケ」はどこにあるかご存じですか。それはギリシャの首都アテネから飛行機なら北へまっすぐ 190 マイルのところにあります。車でしたら 333 マイルで、プレーノからオースティンくらいの距離になるかと思います。

テサロニケは今ではギリシャ共和国の一部ですが、かつてはマケドニア王国の街でした。アテネやコリントのある南の地方は「アカイヤ」と呼ばれていましたが、アレクサンドロス大王（アレクサンドロス三世）の時代には、マケドニアはすでにアカイヤ地方を併合してギリシャを統一していました。アレクサンドロス大王はペルシャを征服し、インド国境近くまで帝国を広げましたが、32 歳でバビロンで亡くなりました。そのあと帝国は 4 つに分割され、その一つがカッサンドロスによって創設された「アンティパトロス朝マケドニア王国」でした。カッサンドロスはテルメの町を首都とし、自分の妻テッサロニカの名前にちなんで、それを「テサロニケ」と名付けました。

マケドニア王国はローマ帝国に征服され終わりますが、テサロニケはその後もローマ帝国の重要な街であり続け、福音宣教

に大きな役割を果たしました。きょうの箇所には「主のことがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています」とありますが、それは決して誇張ではありません。テサロニケはエーゲ海で一番の貿易港であり、また陸路の要所でもありました。多くの人が行き交いするところでしたので、そうした人々によって福音が各地に伝えられたのです。テサロニケは西ローマ帝国が滅びたあとも、コンスタンチノーブルについて東ローマ第二の都市として栄え、古代には数多くの教会が建てられ、その遺跡は世界遺産に指定されています。

一、導きによる宣教

きょうはテサロニケでの宣教について学びますが、この街に最初に福音が伝えられるようになったいきさつをふりかえってみましょう。テサロニケに最初に福音を伝えたのは使徒パウロです。2回目の伝道旅行のとき、パウロはアジアで伝道しようとしたのですが、その道が閉ざされ、しかたなくトロアスにやってきました。パウロは、そこで、一人のマケドニア人が「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と叫び求めている幻を見ました。その幻に導かれてパウロの一行はエーゲ海を渡りました。エーゲ海はアジアとヨーロッパの境界線で、パウロはアジアからヨーロッパへと進んだのです。それはパウロの計画にはなかったことでしたが、このことは後にヨーロッパに福音が広まる第一歩となったのです。神がアジアでの宣教の道を閉ざされたのは、パウロをヨーロッパでに導くためでした。

私たちも願っている道が開かれないことがあります。そんなときは、いったんその道を神にゆだね、改めて神の導きを祈り求めてみましょう。そうすると、自分では思ってもみなかった新しい道が幻（ビジョン）として示され、そこに導かれることがあります。祈りの答えには、`YES`、`NO`、`WAIT`の三通りがあるといわれますが、祈りの答えが`NO`であったからといって祈るのをやめてはいけないと思います。ほんとうの祈りは`NO`という答えを聞いてから始まるのかもしれませんが。神は、一つの道を閉ざされたとしても、かならず別のもっと良い道を開いておられます。祈り続け、求め続ける者はそれを見つけ、手にすることができます。

パウロがマケドニアに行って最初に伝道したのはピリピの町でした。ところが、パウロとシラスはその町で投獄されてしまいました。神の導きでマケドニアに来たのに投獄が待ちました。しかし、その監獄で奇跡が起こりました。地震が起こって囚人たちを縛っていた鎖が外れ、監獄のドアも開いてしまいました。看守は囚人たちが皆逃げたと思い、責任をとって自殺しようとしたのですが、パウロがそれを止めました。誰ひとり脱獄した者がなかったからです。地震は第一の奇跡でしたが、囚人が逃げなかったのは第二の奇跡でした。看守はパウロとシラスの前にひれ伏して「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言い、二人は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と答えました（使徒 16:30-31）。パウロがトロアスで見た「マケドニア人」はこの看守だったのかもしれませんが。看守の救いこそ、第三の、また、本当の奇跡でした。こうしたことは、パウロに神の導きをより強く確信させたことと思います。

テサロニケ 1:5 に「私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いたからです」あるように「確信」は伝道に必要なものですが、同時に日々の信仰の歩みにも必要です。それがなければ、私たちは毎日、小さなことで信仰がぐらついてしまいます。信仰は、なんとなく神を信じるといったものではありません。それは確信を伴ったものです。「神が私をここに導かれた」ことを確認し、その導きに従うとき、私たちは聖霊の力を体験しながら確かな歩みができるのです。

二、聖書による宣教

ピリピの次に伝道したのがテサロニケでした。テサロニケでの伝道は使徒 17:1-9 に書かれています。パウロは、テサロニケのユダヤ人とユダヤ教に改宗していたギリシャ人や有力な婦人たちに、こう言って伝道しました。「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」（使徒 17:3）。パウロは聖書に基づいてイエス・キリストを伝えました。

パウロが宣べ伝えたものは決して、彼が造り出した新しい宗教でも、流行の思想でもありませんでした。彼はどこでも、神のことば、聖書からイエスの十字架と復活とを語り、このイエスこそが救い主キリストである、すべての人の主である。誰であっても、主イエスを信じる者は救われる。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と語ったのです。

神は、イエスが世に来られるはるか以前から救い主のことを

預言しておられました。パウロは聖書の預言とイエスが実際になさり、語られたこととを比べながら、イエスこそ聖書に預言されていた救い主であると論証したのです。そしてその結果、多くの人がイエス・キリストを信じるようになりました。

ところが、テサロニケのユダヤ人がパウロとシラスの命を狙おうとしたので、パウロとシラスはテサロニケのクリスチャンによってベレアの町に送り出されました。ベレアのユダヤ人はパウロの言うことがほんとうかどうか判断するため聖書を調べ、その結果、ベレアでもユダヤ人をはじめとして多くの人たちがイエスを信じる者となりました（使徒 17:11-12）。神の言葉である聖書が人々にイエス・キリストを教え、信仰に導いたのです。このことは、御言葉が人をキリストに導くことを私たちに確信させてくれます。

ビリー・グラハムは大きな伝道集会では、いつも聖書を高々と差し上げて、“The Bible says”と言って福音を語りました。それは、人々の信仰がその場の雰囲気や一時的な感情ではなく、永遠に変わらない確かな神のことばにもとづいたものとなるためでした。神の言葉によって信仰を与えられた私たちもまた、人々に聖書の言葉を分け与えたいと思います。

三、模範による宣教

パウロのテサロニケでの宣教は神の導きによるもの、また、神の言葉によるものでしたが、きょうの箇所にはもう一つのことが書かれています。それは「模範」による宣教だったということです。

きょうの箇所を5節の後半までさかのぼって読んでみましょう。「あなたがたのところで、私たちがあなたがたのためにど

のように行動していたかは、あなたがたが知っているとおります。あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました。その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。」（5～7節）パウロやシラスたちはテサロニケのユダヤ人から命を狙われるほどの目にあいました。パウロの宣教によってイエス・キリストを信じた人々も同じように苦しめられました。けれども、テサロニケのクリスチャンはみことばに支えられ、聖霊の力をいただいて信仰にとどまりました。信仰のゆえに苦しみを受けたとき、それによって、私たちのために苦しまれたイエスの苦しみにあずかる者になれたことを喜んだのです。

テサロニケのクリスチャンがそうすることができたのは、「私たちに、そして主に倣う者になりました」とあるように、パウロやシラスの信仰の姿を見たからです。パウロたちの目に見える模範を通して、目に見えない主イエスの姿を見たのです。テサロニケのクリスチャンはイエスを救い主として信じるだけでなく、イエスを模範として従う者となったのです。

私は宣教についてこう学びました。「福音宣教とは、人格であるイエスを人格から人格へと伝えることである。」パウロはその通りに、戒律でも、儀式でも、理論でもない、生きておられるイエス・キリストを伝えました。しかも言葉だけで伝えたのではなく、テサロニケの人々を愛して、人々と苦しみをともにしながら伝えたのです。何かを伝えようとするとき、言葉だけでは、それがどんなに論理的で正しいことであっても、相手の心には届きません。そこに、その言葉が伝えようとしていることを分かってほしいという願いがこもっていなければなりま

せん。福音を伝える場合は、それを聞く人が救われてほしいという愛がともなわなければなりません。矢は弓にセットされ、勢いを与えられてこそ、的に届きます。福音を伝えるとき、そこに情熱や愛がなければ矢を手でほうり投げるだけのようなもので、決して相手の心の的に届かないのです。

7節には「その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです」とあります。パウロを模範としてそれに倣ったテサロニケの人々は、今度は、マケドニアとアカイア、つまり、全ギリシアの信仰者の模範となりました。テサロニケのクリスチャンは、イエスを信じて生きることがどんなことかを目で見て知ることのできる信仰の生きた実例となりました。私たちも、そのように福音を身をもって示すような者になりたいと願っています。

8節に「主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡った」とありますが、「響き渡る」という言葉はギリシャ語訳聖書のヨエル 3:16 にも使われていて、そこでは「ほえる」と訳されていますが、主がライオンの雄叫びのように声を上げる様子を表すのに使われています。この言葉には力づよく、どこまでも届くという意味があります。ある人は、この「響き渡る」をシンバルが響くようなものだと言いました。主は、私たちが心から福音を聞き、信じ、それに従うとき、私たち一人ひとりを用いて多くの人々に救いの福音を語り、届けてくださるのです。それぞれに役割りは違いますが、私たちもまた、福音宣教の一部になりたいと願います。

(祈り)

父なる神さま、あなたは私たち一人ひとりに福音をゆだねて

くださいました。それをどのように果たせばよいのかについて、なおも教え、具体的な導きをお与えください。そして、福音が響き渡るのを聞いて喜び、それを見てあなたをほめたたえる者としてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。